

情報交換『『聴く』ことに課題をもつ子の指導・支援のあり方について』

情報提供者 伊豆の国市立韭山小学校 通級指導教室（LD等）担当

教諭 鈴木千晶

### ○情報交換で出た意見

#### ① 各教室の実態

- ・まず椅子に座ることが難しい子がいる。
- ・集中が続かず、注意が逸れてしまい、話を聞けない子が多い。
- ・園や学校から、全体指示が聞けないという理由でことばの教室に来る子が多い。
- ・音韻意識の弱い子が多い。（例：テレビ→テビレ）
- ・聞き分ける力がないため、発音する力が付いていかない。



#### ② 「聴く力」を育むための実践事例

- ・話に注意を向けさせるために、教材をカーテンで隠している。
- ・課題の難易度を調節し、「聞けた！」を実感させる。特に、幼児期は「聞くことが楽しい」という経験が大事である。
- ・多動傾向のある子には、あえて指導前に部屋の中を歩き回らせてから椅子に座らせる。無理に椅子に座らせるより効果的である。
- ・単語や文字の並び替え、ぬきぬき言葉、かくれんぼ言葉、変身言葉、3ヒントクイズなど聞くだけのトレーニングを繰り返し行っている。
  - 例・「え・つ・く」並び変えるとできる言葉は？（文字の並び替え）
    - ・「いばぬば」、『ば』を取るとどんな言葉になる？（ぬきぬき言葉）
    - ・「ぼうし」かくれている動物は？（かくれんぼ言葉）
- ・自分の話ばかりしてしまい、人の話を聞けない子には、一つのお手玉を交互に持ち、話すターン、聞くターンを視覚化している。
- ・聴覚情報だけではイメージのわからない子には、視覚支援を必ず行っている。
  - 例・絵を描く。
    - ・タブレット端末で画像を見せる。
    - ・思考ツールを用いる。
- ・磁石を使ったり、複数のフラフープの中を移動させたり、言葉を音として捉えさせる。

#### ③ 最低限つきたい「聴く力」を定義すると？

- ・相手を意識して、やりとりを楽しむこと。
- ・人や事柄などに関心や興味をもつこと。
- ・自分の発音や声の大きさに気付くこと。
- ・聞く姿勢を身に付けること。（体幹づくり）



事例検討「相手に分かりやすく話す」という意識を育てる支援・指導  
事例提供者 浜松市立追分小学校 通級指導教室（児童言語）担当  
教諭 関口由美

○グループ協議で出た意見

- ・本児の場合、まずは吃音の指導をしたい。本児はまだ自分の吃音を受け入れられていないと感じるため、5W1Hの話し方よりも自分の思いや考えを最後まで話せることが大事ということ伝えていきたい。
- ・担当は座る位置（向かい合わせになると話しにくい場合もある。）に気をつけ、本児の話をつくり聞き、通級が安心して話せる場になることが大切である。本児の話したい気持ちを引き出すために、本児の好きなことや興味のあることを話題とすると良いと思う。
- ・話しやすくするために、選択肢のある課題「すきなどっち？」や、テーマを選べる「サイコロトーク」、吃音学習の「すごく！すごろく」などを利用してはどうか。
- ・自然と話せる活動や自分から声を出したくなるゲームを取り入れる。「道案内をしよう」「すいかわり」「お店屋さんごっこ」などの活動は、相手意識も育てる。
- ・吃音が出た時にどうしてほしいのかなど、本児の思いを聞いてあげたい。また、言葉につまり会話が止まってしまった時に、「息を吐いたら言うことができた」などの経験をさせていきたい。
- ・同じ吃音の仲間とのグループ指導を増やしたい。リモートを利用することもできる。



事例検討「言語発達遅滞の子どもの話す力を向上させるための

支援・指導について」

事例提供者 浜松市立二俣小学校 通級指導教室（児童言語）担当  
教諭 鈴木沙希

○グループ協議で出た意見や情報

- ・体験を通して言葉を広げていくことが大事。ホットケーキ作りや買い物ごっこなど、楽しみながら取り組むことで印象に残りやすくなる。
- ・動作化、絵辞典、タブレット等、単語とイメージをつなげるための支援が良かった。
- ・「4コマ漫画」や「どこがへん？」「すきなどっち？」などを利用してはどうか。
- ・覚えることが苦手な子には、ワーキングメモリーを鍛えるゲームを入れている。
- ・退級のタイミングについては、言語発達遅滞は終わりが見えないことが多いため、通級対象なのか、LDなのかなど、学校と情報交換しながら見極めていく必要がある。
- ・地域によって入級退級の目安が違う。2年で終了という地域、幼児からつながる言語発達遅滞の児童は1年間のみという地域、1年生に上がる時にいったん終了して学校で通級なのか支援級なのか見極めるといった地域など、さまざまである。
- ・制限がない地域は、1主訴1終了でよいのではないかと？主訴を見極めた上で指導し、児童や保護者が納得して終了できるようにしたい。

情報交換「書くことの苦手な児童・生徒の支援について」

情報提供者 静岡市立番町小学校 通級指導教室（LD等）担当

教諭 織部雄大

○情報交換で出た意見

① 担当者より話題提供・事例紹介

- ・4年生 男児（2年目）：片仮名や漢字の読みや書きに困難さがある。
- ・【読むこと】漢字…「読めない。漢字嫌です。」と拒否反応を見せる。  
→漢字をへん・つくり・かんむりなどの部分や片仮名等に分解し、組み合わせて覚える。また、分解した文字を生成AIでイラスト化する。
- ・【書くこと】片仮名…表出に時間を要し、50音表を見れば書ける。  
→平仮名と片仮名のマッチング指導、連想法（サラダのサ）、ジェスチャー法（身体を用いる）

② 質疑応答

- ・「学校として、どんな支援をしているか」→「読み上げ支援を行っている」
- ・「ほかの児童と違う学習方法を用いる点について、何か配慮しているか」  
→「単元内自由進度学習や個別最適化としてPCやノート等を自由に選択する授業づくりをしている」
- ・「読み書きが苦手な児童に対して、どんなアセスメントをしているか」  
→「読み：清音がどの程度読めるか 書き：50音やアプリ（美文字）でどの程度書けるか」

③ グループ協議（グループに分かれ話し合い、全体場で発表）

「読み書きが苦手な児童の片仮名・漢字の指導について」

【片仮名指導】

- ・児童・生徒の好きなもの（アニメや鉄道など）を教材化
- ・カタカナカード（くもん）、カタカナことばさがし（knock knock）  
国語教室（※1）、砂文字

【漢字指導】

- ・片仮名や1・2年生の漢字を学習し、片仮名やへん・つくり・かんむりなどの部分を組み合わせて覚える。記号を部首に置き換える。
- ・漢字イラストカード（山田充）を使用する。
- ・空書きや指書きなど、身体を用いる。

○と△→イと左

「ICT機器の活用について」

- ・アプリ（美文字）
- ・通級指導教室 教材倉庫（※2）
- ・デジ教科書のフラッシュカード



④ 担当者より

- ・事例で紹介した指導方法は、ほかの児童にも合うとは限らない。一人一人に合う指導を見つける楽しさを感じながら試行錯誤していきたい。



令和7年度 第2回定例研修会 「コミュニケーション」分科会 記録

情報交換「コミュニケーション指導に役に立つ教材・教具・指導法」

情報提供者 掛川市立中央小学校 通級指導教室（LD等）担当

教諭 森下直子

○情報交換の様子

情報提供者の森下先生は、この分科会に参加した先生方が、「明日からこの教材で指導してみよう」と思いながら帰って行くような、実りある分科会にしたいと考えてくださいました。

そこで、参加者の先生方が、日頃コミュニケーション指導で使用している教材・教具・指導法をレポートにまとめ、それを持ち寄って紹介し合う形式にしました。

参加者の人数が多かったため、幼児と学齢の2つのグループに分かれ、持ち寄ったレポートをスクリーンに大きく映し、一人ずつ紹介していきました。第1部は市販の教材・教具、第2部は手作りの教具・指導法の紹介でした。紹介に対して、質問や付け足しがある場合には、その都度発言して、教材・教具・指導法の知識を深めていきました。

最後の30分間は、各自が紹介したレポートと教材・教具を床に並べ、実際に手に取って見合う時間にしました。自然に教材・教具の回りに人の輪ができて、試す光景がたくさん見られました。「これってどうやるんですかねえ。」「これはこうやるんですよ。」と、先生方の対話も広がっていき、とても和気あいあいとした雰囲気でした。

分科会が終わり、解散になると、「〇〇は絶対買いだな。」「明日からさっそく〇〇をやってみようかな。」という声があちらこちらから聞こえ、情報提供者の森下先生の願い通りの、とても実りある分科会になりました。



学齢グループ



幼児グループ

事例検討「個別の支援計画・指導計画を活用した小中高の連携について」

事例提供者 静岡市立大里中学校 通級指導教室（LD等）担当

教諭 河村佳美

○事例検討で出た意見

① 個別の支援・指導計画引継ぎの状況調査

- ・通級の児童生徒は高校への引継ぎ希望が多い。指導計画は保護者に渡す、在籍校に送る、保護者と内容の合意形成を行うなど地域で温度差があった。

② 合理的配慮

- ・中学校より小学校からの支援で実績を積むのがよい。
- ・テストの拡大とルビ付き、時間延長、漢字指定でなければ平仮名で書けばよい。
- ・タブレット入力でテストを受けた実績から高校へ校長から連絡してもらった実例があった。本人が希望しているかで配慮が変わる。

③ 事例について小中学校通級でできること

（状況調査グラフから読み取れること含む）

- ・進路目標をモチベーションに、早めに体験に行く。
- ・中学進学で自分の力を知り、目指す進路が決まり、親の意識が変わった。



事例検討「中学生のLD（学習障害）について」

事例提供者 焼津市立焼津中学校 通級指導教室（LD等）担当

教諭 加藤誠

○情報交換で出た意見

① 主に書き障害のある事例

- ・対象生徒の目標について・・・本人の困り感、「何ができるようになりたいのか」という部分から検討していく事が望ましい。  
→そのためのメタ認知であり自己理解が必要である。
- ・「書けない」という困り感・・・板書→タブレットで撮影→手書きで写す。
- ・読み書き障害→どのくらいできないのか、はっきりした困り感を見つける。
- ・できない事に焦点を置くより、できる事、得意な事など生徒自身の強みを生かした目標設定の重要性を感じる。

② 主に算数障害がある事例

- ・教科書の例題を中心に学習に取り組んでいる。
- ・テスト範囲から絞って学習し、少しでも「できた」を体験させていく。
- ・十一の加法、乗法の基本をきちんと学習し、「ここはできる」という100%の自信をもって解答できる部分を作る。  
→分数・小数ではなく整数のみで学習する。
- ・進路の話から見通しをもって考えるようにする→在籍校との連携が大切である。